開発途上国から学ぶ国際社会福祉
ー　貧困問題と開発型ソーシャルワーク　ー

○九州大学大学院　　稲葉　美由紀（4442）

キーワード：開発型福祉、社会開発、ソーシャルワーク

１．研 究 目 的

従来、貧困と言えば開発途上国における貧困ライン以下（通常１日 1.25 ドル以下）で生活している人々を想像する。貧困と連携してスラム、児童労働、人身売買、地域格差、人口問題などがあげられる。社会保障制度が十分整備されていない途上国では、貧困層は巨大なインフォーマル・セクター経済内の劣悪な環境の中で生存ぎりぎりのレベルの生活を強いられている。その一方、先進国において貧困が見えだした（もしくは無視できなくなりだした）のは 2007 年の金融危機以降、雇用体系が激変し格差が拡大するとともに多くの先進国においても貧困問題は深刻化している。セーフティネットの中心であるはずの社会保障制度が機能不全に陥っている状況にあり、その結果、制度の狭間でコモン・ニューマン・ニーズも充足できない状態に多くの人々が直面している。同時にそのような人々のニーズも多様化・複雑化しており対応な困難なケースが急増している。このようなニーズに対応するには従来のアプローチと平行して福祉の枠組みを超えた、開発型のアプローチが必要ではないか。本研究では、1970 年代以降開発途上国で実践されてきた社会開発的アプローチ（または開発型ソーシャルワーク）が貧困の拡大する先進国においていかに適応できるか、その可能性を探ることを目的とする。

２．研究の視点および方法

〈研究の視点〉　社会開発は 1995 年の社会開発サミットから再び注目されており、これは貧困撲滅、雇用、社会的統合を達成するために経済開発のダイナミックなプロセスとの関連で国民全体の福祉の向上（well-being）を目指す計画的社会変革のプロセスである（Midgley & Conley, 2010）。1960 年代から開発途上国において経済開発プロジェクトやコミュニティ開発に関連づけられて実施されてきた。このアプローチは開発型ソーシャルワークとしても知られ、近年では先進諸国のソーシャルワーク実践における適応の可能性について関心が高まってきている。先進国のソーシャルワークは途上国の貧困削減プログラムや戦略に取り組むソーシャルワーカーの経験から学べるのではないか、という立場から検討する。

〈研究の方法〉ソーシャルワークおよび国際開発分野の社会開発に関する歴史的経緯、理論的側面と実践に関する論文、先行研究、国連の報告書などの文献レビュー、関連分野への国際会議参加、関係者へのインタビューなどの調査手法を用いた。

３．倫理的配慮

本研究は文献調査による研究が中心であり、報告の際の配布資料では参考・引用文献の原著者名・出版年・ 文献・出版社・引用箇所を明示している。インタビューは研究内容を説明し、本人からの合意を得て実施した。日本社会福祉学会の研究倫理指針に従って研究を行っている。

４．研 究 結 果

開発型ソーシャルワークは、社会的に脆弱なグループを対象としながら個人、グループおよびコミュニティの主体性や潜在能力の発見と増強（セン、2000）、収入創出プログラムの開発、教育や学習を通して人的・社会的投資に焦点を当て地域をベースにしたアプローチである。米国では 1970 年代から途上国出身や国際機関で勤務経験のある研究者や実践者によって指示されてきた。社会開発アプローチはソーシャルワークのストレングス、エンパワーメント、社会正義、人権、住民参加を重視する点で一致するものである。開発途上国の開発段階のコミュニティ開発や地域開発の具体的な経験を通して、現地のソーシャルワーカーによって開発的な考え方を用いたソーシャルワーク理論と実践の発展に大きく貢献してきた。このような観点に基づいた実践は主流とは言えず数すくないが確実に先進国においても報告されてきている。例えば、コミュニティを基盤にした雇用と起業家プログラム、マイクロクレジット（例、バングラデシュからアメリカへの逆輸入版のグラミンアメリカ）、マイクロエンタープライズなど福祉対象者の経済的な参加、育児、成人リテラシー、シェアハウス、職業訓練、資産貯蓄口座（Sherraden, 2005）などのエンパワーメントと人的投資は人々の生活水準を向上させるもので、ソーシャルワークの新たな実践領域、方法、方向付けを提案するものだと考える。さらに、近年 ILO と UNRISD の取り組んでいる社会的経済・連携経済プログラム（Social and Solidarity Economy）は新自由主義や利益追求の市場経済の枠組みとは異なる代替経済の模索、経済活動のあり方、新たな消費・生産の価値・行動パターン、社会のあり方を模索するもので今後も注目していきたい（ILO, 2011）。

５．考　察

開発途上国において実践され発展してきた開発型ソーシャルワークは、貧困削減・地域福祉アプローチとして日本のソーシャルワーク実践のあり方に多くの示唆を与えてくれる。途上国におけるコミュニティ開発、地域を基盤としたリハビリテーション（CBR）、雇用創出と地域活性化、マイノリティの問題などの経験について多くの研究者および実務者との交流が必要である。また、この分野にソーシャルワーカーが関心を持つことは、国際協力分野におけるソーシャルワークの貢献につながるであろうし、同時に開発型ソーシャルワークの視点を持ったソーシャルワーカーが必要だと考える。

《参考文献》

・ ジェームズ・ミッジリィ著　萩原康生訳（2003）『社会開発の福祉学：社会開発の新たな挑戦』旬報社。
・ アマルティア・セン著　石塚雅彦訳（2000）『自由と経済開発』日本経済新聞社。
・ Midgley, J.＆Conley, A. (Eds.) (2010). Social Work and Social Development: Theories and Skills for Developmental Social Work. Oxford: Oxford University Press.
・ ILO (2011). The Reader 2011: Social and Solidarity Economy: Our common road towards Decent Work. Turin, Italy: International Training Centre of the ILO.
・ Sherraden, M. (Ed.) (2005). Inclusion in the AMERICAN DREAM. New York: Oxford University Press.